



「言葉の力」 大岡 信

美しい言葉とか正しい言葉とか言われるが、単純に取り出して美しい言葉とか正しい言葉とかいうものはどこにもありはしない。それは、言葉というものの本質が口先だけのもの、語彙だけのものではなくて、それを発している人間全体の世界をいやおうなし背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。そのことに関連して、これは実は人間世界だけのことではなく、自然界の現象にそういうことがあるのではないか、ということについて語っておきたい。

京都の嵯峨に住む染色家、志村ふくみさんの仕事場で話をしていた折、志村さんがなんとも美しい桜色にそまった糸で織った着物をみせてくれた。そのピンクは淡いようでいて、しかも燃えるような強さを内に秘め、はなやかでしかも深く落ちついている色だった。その美しさは目と心を吸い込むように感じられた。

「この色は何から取り出したんですか」

「桜からです」

と志村さんは答えた。素人の気安さで、私はすぐ桜の花の色びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。実際は、これは桜の皮から取り出した色なのだった。あの黒っぽいゴツゴツした桜の皮からこの美しいピンクの色がとれるのだという。志村さんは続けてこう教えてくれた。この桜色は、一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮をもらってきて染めると、こんな上気したような、えもいわれぬ色が取り出せるのだ、と。

私はその話を聞いて、体が一瞬ゆらぐような不思議な感じにおそわれた。春先もうまもなく花となって咲き出ようとしている桜の木が、花びらだけでなく、木全体で懸命になって最上のピンクの色になろうとしている姿が、私の脳裏にゆらめいたからである。花びらのピンクは、幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはいわばそれらのピンクが、ほんの先端だけを姿を出したものにすぎなかった。

考えてみればこれは真実その通りで、樹全体の活動のエッセンスが、春という時節に桜のはなびらという一つの現象になるにいないのだった。しかしわれわれの限られた視野のなかでは、桜の花のピンクしか見えない。たまたま志村さんのような人が、それを樹木全身の色として見せてくれると、はっと驚く。

このように見てくれば、これは言葉の世界の出来事と同じことではないかという気がする。言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚だで行っていい。一見したところぜんぜん別の色をしているが、しかし、ほんとうは全身でその花びらの色を生み出している大きな幹、それを一語一語の花びらが背後に背負っているのである。そういうことを念頭におきながら、言葉というものを考える必要があるのではないだろうか。そういう態度をもって言葉の中で生きていこうとすると、一語一語のささやかな言葉の、ささやかさそのものの大きな意味が実感されてくるのではないだろうか。それが「言葉の力」の端的な証明であろうと私には思われる。

～大岡信「詩 ことば 人間」P36 - 39 講談社学術文庫～

Mediation poco a poco 2006年1月24日(火)

<http://listen-watch-listen.cocolog-nifty.com/mediation/>

